

められる。またヒエロニムスとの比較で、かれの *Epistola* には *monachus* や *monasterium* という言葉がみられるのに、アウグスティヌスは *mor. I* ではこれらの言葉をさけているようにみえるが、それはポンティキアヌスによってかれに開かれた社会では *monasterium* の代りに *diversorium* が、また *cella* の代りに *habitaculum* が用いられたからだと考えられている。

以上のように本書はマニ教と聖書を視点として *mor. I* を詳細に研究し、さらにその内蔵する問題を発展的にとらえようとしている。紹介すべき箇所はまだ多くあるが、ひとつの著作に集中したことにより論述は綿密なものとなっており、とくに第2、第4、第5章はそうである。しかし同時にそこにこの書の限界も存するのであって、著者の視点を設定したために、その結論部で *mor. I* がひとつの主題を扱っていない以上結論をまとめることはできず、各々の個所がすでに結論である、といわざるをえなくなっている。しかしアウグスティヌスは、とくに初期著作にみられるように、はっきりした意図をもって著述する場合が多いのであり、そうであるとするならこの *mor. I* においても著者の成果をふまえて、さらに深く統一的な視点を探究することもできるのではないかとおもわれるのである。

John Marenbon : *From the Circle of Alcuin to the
School of Auxerre: Logic, Theology and Philosophy
in the Early Middle Ages*

(Cambridge studies in medieval life and thought, Third series, vol. 15)

pp. ix+219, Cambridge University Press, 1981

金井多津子

本書は次のような構成を取っている。1. Aristotle's *Categories* and the problems of essence and the Universals : sources for early medieval philosophy, 2. Logic and theology at the court of Charlemagne, 3. Problems of the *Categories*, essence and the Universals in the work of John Scottus Eriugena and Ratramnus of Corbie, 4. The circle of John Scottus Eriugena, 5. Early

medieval glosses on the problems of the *Categoriae*,

一般に、8世紀から10世紀初頭にかけての時期は、B. Hauréau (*Histoire de la Philosophie Scolastique* I, 1872), J. B. Gaskoin (*Alcuin: his life and work*, 1904), M. Grabmann (*Die Geschichte der scholastischen Methode* I, 1909), F. Copleston (*A History of Philosophy* II. *Medieval philosophy*, 1950) 等によって、哲学的にも不毛な時代だとみられている。しかし、著者マレンボン（以下 M. と略記）は、この時代のシャルルマーニュおよびその孫（シャルル禿頭王）の宮廷、そしてコルビー、オーセールの修道院における活動には論理学と神学の fusion がみられるとし、そこに中世初期における最初の哲学的試みを読み取ろうとする。そして、この点を、usia, カテゴリー、普遍に関する当代の議論を軸として例証することが本書のテーマとなっている。本書には、1. *Texts from the circle of Alcuin*, 2. *A Periphyseon florilegium*, 3. *Glosses to the Categoriae Decem*, が Appendix として付加されているが、これも上記の構成と相まって、M. のこうした意図を如実に反映するものといえよう。usia に関する議論は、アリストテレス（以下 A. と略記）の *Categoriae*（以下 C. と略記）の特に第5章に端を発する。usia に関しては、現代においても、それが個体を意味するのか、あるいは普遍を示すのか議論のあるところである。だが M. は、A. の usia を個体とみることが A. 本来の意図に即した解釈であるとし、usia が、中世初頭、普遍と同一視され、いわば usia が非 A. 的に解釈されていく過程に、上記の論理学と神学の fusion の過程を重ね合せようとする。このような解釈のなかで、A. 本来の立場である個体の普遍に対する優位性は存在論的にも認識論的にも欠落し、さらには後にふれるヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ（以下 E. と略記）にみられる hyper-Realism への道が開かれることになった、と M. はいうのである。

こうした視点から、中世において流布していたラテン語による C. に関するテキストのなかで、M. がとりわけ重視するのは *Categoriae Decem*（以下 C. D. と略記）である。本書は、C. のテミスティウスによるパラフレーズの彼と同時代の Albinus なる人物によるラテン語への翻案であり、現在は *Aristoteles Latinus*（以下 AL と略記）I, 1—5 (pp. 133—75, ed. Minio-Paluello) に、*Anonymi Paraphrasis Themistianae* と題され所収されている（Albinus については cf. C.

D. §20, AL I, 1—5, p. 137)。だが同書は、中世においてはアウグスティヌス（以下 Aug. と略記）によるものとみなされ、アルクインも Aug. によるギリシア語からのラテン訳とみなしており (cf. AL I, 1—5, LXXVIII), ミーニュにおいても Aug. の著作中に収録されているものである (MPL, 32, 1419—40)。M. は、たとえばボエティウス（以下 B. と略記）による C. 自体の忠実な翻訳よりもこの C. D. の方が重用された理由を、そこにみられる先にふれた非 A. 的 usia 解釈と中世初期の哲学者たちの関心との一致に求めているのである。以下 M. の C. D. に対する観点を中心に本書の内容をフォローすることにする。

C. D. は、従来の研究では、C. Prantle の *Geschichte der Logik im Abendlande* I (1855, SS. 669—72) に代表されるように、C. の単純なパラフレーズとみなされ、とかく軽視されてきたが、M. は、同書を註釈を鏤めた C. の要約とみるべきだと主張する (p. 20)。同書には、それに対する多くの glossae の存在が示すように、中世初期の哲学者たちの関心を惹いた問題、つまり usia と他のカテゴリーとの関連 (§§ 52—4—節番号は AL による—), *δύναμις* と *ἐνέργεια* との区別 (§102), 中庸の徳 (§ 160), 量 (§§ 72—92), M. が E. に対する影響をみる (pp. 83—86) 時間と場所 (§§ 145—6) の問題等が論及されている。だが M. は、先の問題意識からその § 5, §§ 19—20, § 57 に着目し、そこから、usia に関し A. 的見解と非 A. 的見解との C. D. における共在を指摘する。すなわち、§§ 19—20 においては、一面では、C. における A. の叙述は、〈*quae dicuntur*〉についてでも、また〈*quae sunt*〉についてでもなく、〈*quae percipiuntur*〉を対象とするものだとされる (cf. §§ 13—16, 22—25)。他面、§ 5 においては、usia がすべてのものを無限に包摂する名称ととらえられ (...*ingenti quodam et capaci ad infinitum nomine omne quidquid est comprehendens...*)、さらに続いて、usia の外部には何も見い出されず、何も考えられない (*extra quam nec inveniri aliquid nec cogitari potest.*) と述べられてくる。また、§ 57 においても、一面では C. に忠実に〈*usia... quae neque in subiecto est neque de subiecto significatur, ut est hic homo vel hic equus.*〉としてとらえられているが、他面、同所において usia がすべてを支えるがゆえに、それ自体はいかなる genus ももたない (*ipsa autem usia genus non habet cum omnia ipsa sustineat*) ともいわれているのである。これらの点を根拠に、

M. は C. D. において、用語そのものはみられないにせよ、次にふれる本書第2章の主題となる Munich Passages (以下 M. P. と略記) に現われてくる usia の M. のいう非 A. 的見解、つまり、いわば genus generalissimum としての usia、ならびに現象界を形成するすべての accidentia を支える基体としての usia という2つの発想が融合され、これが、usia が神と同一視されていく契機となった、とみているのである (p. 23)。

M. P. とは、シャルルマーニュの宮廷学校における教材として用いられたものであり、以下の15の節からなる I. DE DECEM CATHEGORIIS AUGUSTINI ; II. QUOMODO SANCTA ET SEMPITERNA ATQUE INCOMMUTABILIS TRINITAS FACILLIME POSSIT INTELLEGI ; III. QUO ARGUMENTUM COLLIGENDUM SIT DEUM ESSE ; IV. INTERROGATIO, RESPONSIO ; V. UTRUM SECUNDUM TEMPUS AN SECUNDUM EXCELLENTIAM DEUS ANTE TEMPORA ; VI. DE LOCO DEI ; VII. DICTA ALBINI DE IMAGINE DEI ; VIII. DICTA CANDIDI PRESBITERI DE IMAGINE DEI ; IX. PROPTER QUID HOMO FACTUS EST ; X. QUEMADMODUM PROBARI POSSIT ANIMAM ESSE INLOCALE ; XI. SI POSSIT VERUM ESSE SINE VERITATE ; XII. QUOMODO QUIDQUE SIT ; XIII. QUID SIT SUBSTANTIA ; XIV. DE LOCO ; XV. DE TEMPORE. これらのうちVII.とVIII. (以下上記の番号により節を示す) を除く他の13節は著者が挙げられておらず不明である。M. P. は、これまでに Hauréau 等によって部分的に刊行されただけであるが、V (München clm 6407), B (München clm 18961), P (Paris BN 13953) 等の有力写本の異同の検討を通してのテキストの校訂 (Appendix I, pp. 144—70) が本書のひとつの眼目となっているといえよう。

M. は、M. P. のこれら15の節を、各々の主題に従って、(a)三位一体 (II. VII. VIII. X.), (b)神の存在証明 (III. IV.), (c)10のカテゴリー (I. XII. XIII. XIV. XV.), (d)三段論法の実践 (V. VI. XI.) という4つのグループに分類する。残りのIX. は、(a), (b)の主題を関連づけるものとして別に位置づけられている。この場合、先にみた C. D. との関連上、注目を要するのはグループ(c)であり、M. は、そこにおける usia に関する A. 的見解 (XII. XIII.) と非 A. 的見解 (I. XIV. XV.)

の共在を指摘する。たとえば XIII. においては、〈substantia est quod neque in subiecto est neque de subiecto praedicatur. substantia est Plato uel Cicero.〉という A. の C. に即した usia の規定がみられる (M. は、この典拠として、カシオドルスの *Institutiones*—II, iii, 10—に伝存する B. による C. の翻訳を挙げる)。これに対し、I. においては、usia が〈substantia siue essentia, hoc est Deus.〉とされ、さらに9つのカテゴリーと神との関係が、たとえば Qualitas については〈Deus autem sine qualitate bonus〉, Quantitas については〈Sine quantitate magnus〉, Ad aliquid については〈Sine indigentia creator〉と述べられている。これは内容上は Aug. の *De Trinitate* 第V巻1—2章にほぼ対応し、標題にも彼の名前がみられるが、しかし M. は、その直接の典拠を Aug. 自体にではなく、usia の非 A. 的解釈がみられた先の C. D. に求めている (p. 51)。しかもこの I. においては、さらに usia について〈Decima autem, hoc est substantia siue essentia, omnis creatura dicitur, ex quo creatura est et quamdiu in sua natura persistit.〉と述べられ、C. D. にはみられない participatio の発想が展開されてきている。こうした見解は、A. 本来の観点がプラトンのならびにキリスト教的観点から再解釈された結果生じたものである、と M. はみるのである (p. 51)。そして、M. は、アルクインを中心とするサークルの存在を推定し、M. P. のこれらの諸節の成立もそれに帰すが、この場合、VII. (*dicta Albini*) はアルクイン自身によるものであり (Albinus はアルクインの異名)、その他の諸節の著者として Candidus を想定する (p. 43)。これは、カロリング朝において Fredegisus を重視する従来の傾向に対し、新たな視点を提供したものといえよう (chap. 2, esp. pp. 55—66)。

さらに、C. D. にみられる usia の非 A. 的見解をもとに独創的な思想を展開してくるのが、本書の第3章以降において取り上げられる E. である。M. は、E. の主著 *Periphyseon* の思想を分析し、それが 1. a radical negative theology, 2. hyper-Realism, 3. an ontology of participation, 4. a theory of space as a definition という4つの原則に立脚しているとみるのである (p. 86)。カテゴリーとの関連で神をとらえようとする問題意識においては、E. は Aug. ならびに M. P. と共通性を有しているといえる。しかし、E. においては、被造物に対する神の超

越性がとりわけ強調され usia すらも神に適用することは妥当ではないとされているのであって (I, p. 86 : 29—31 —I, II は I. P. Sheldon-Williams の校本に, III—V は MPL 122 による—), そこに, Aug., M.P. との相違があり, また彼の思想の中核をなす negative (apophatic) theology の基礎があるとみることができ。次いで, 普遍に関し, E. は, subiectum と de subiecto との間に差異はないと主張し (I, p. 102 : 11—21), それをもとに M. が hyper-Realism と称し着目する次のような見解を展開する。つまり, 種は複数の個体から構成されているが, それら個体の各々が即十全に種であり, かつ種に属する個体は多でありながら, 種において1つの個体だといわれる。換言すれば, E. においては, [1=多=1] という構造において種 (普遍) と個とが同一視され, ひいては普遍と個双方の実在性が肯定されている, と考えられる。この点に関し C. Prantle (*op. cit.* II, SS. 22—37) や P. Mandonnet ('Jean Scot Erigène et Jean le Sourd' *Revue Thomiste*, 5, 1897, pp. 384—94) が E. の思想における Realism と Nominalism の共在を主張するのに対し, M. はこれを hyper-Realism ととらえるのである (p. 75)。この場合, M. は, hyper-Realism の発想自体はすでに B. の《*Isagoge* 註解 ed. secunda》(lib. I, cap. 10—11) において端緒が開かれていたとみており, B. の同書の完全な写本は10世紀以前には存在していないものの, 限られた範囲にせよ, すでに9世紀において同書が流布していたとみなし (p. 15), E. が *Periphyseon* においても同書のこの箇所を用いたのではないかと推定している (p. 77)。ただし B. のこの箇所は M. も自認しているように (cf. p. 23, n. 44), 解釈上非常に議論のあるところであり, M. の B. に対するこうした見解は今後検討を要するであろう。また M. は, subiectum, de subiecto 等の用語の典拠に関し, B. の同書を挙げる Sheldon-Williams に反対し, C. D. にそれを求めているが (cf. p. 75, n. 25), これは, 上記のような推定を勘考した場合, 理解に苦しむ点である。なお, hyper-Realism にみられるいわば [1=多=1] の構造は, *Periphyseon* 第 II 巻では (II, pp. 6 : 26—8 : 35), 創造の過程, および墮罪・贖罪を経ての神への還帰の過程に, [1→多→1] というネオプラトニズム的構成をとって反映されているのであって, ここに, M. は E. において論理学と神学の fusion の極致をみているように思われる。

他方、M. は、*usia* は感覚、知性いずれにとっても *incomprehensibilis* であるという *Periphyseon* 第 I 巻にみられる E. の見解 (I. pp. 102 : 31—104 : 6) に着目し *usia* について敢えて知ろうとすれば、1) particular *usia*—universal *Usia*, 2) *usia*—他のカテゴリー、3) *usia*—物質界という他との関連からそれを理解せざるをえないとし、これらの論点から、同書全体を通して hyper-Realism 的 *usia* 観が一貫されているわけではない、と主張するのである。

1)の論点についてみると、事実、第 I 巻において、偽ディオニュシオス、マクシムスを典拠として *οὐσία, δύναμις, ἐνέργεια* の triad が論及されてくる局面になると、*essentia* (universal *Usia*) と *substantia* (particular *usia*) との区別が導入され、両者の関係が、前者から後者が *naturalis progressio* によって流出し (*manare*, I, p. 182 : 7—12)、逆に後者は前者に *particeps* する (I, p. 182 : 22—6) と述べられており、先の M. P. I. にみられた *participatio* の観点が展開されてくる。この場合、*progressio* の観点からすれば、*essentia* はすべてのもののうちに *una et universalis* にあるといわれている限りにおいて、hyper-Realism 的観点が保持されていると考えられる。だが、*participatio* の観点からすると、すべての *substantia* は *similiter* に *essentia* に *particeps* しているわけではないといわれ、さらにそこにおいて *essentia* と *substantia* とが区別されていることと相まって、こうした *participatio* の観点は hyper-Realism と両立しがたいと M. はいうのである。こうして M. は、E. における hyper-Realism をとりわけ強調する反面、上記のような論点をたてることにより、*Periphyseon* にみられる *usia* 論にそれと矛盾する主張の存在を摘出するが、これは E. の同書における *usia* の多義性と理解することも可能ではないだろうか。

なお M. は、E. の思想は同時代においてはほとんど無視され、12世紀において着目されてくるとする従来的一般の見解に対して異を唱えている。つまり、*Periphyseon* の E. とほぼ同時代の写本にみられる欄外の註 (*i*¹, *i*²) に着目し、E. の周辺に、先のアルクインの場合と同様、たとえば Sedulius Scottus, Martin of Loon 等から成るサークルの存在を推定し、同書の同時代における影響を指摘するのである (chap. 4)。だが、このサークルの一員である Heiric of Auxerre 等を中心とするオーセール学派になると、*usia* 等に関する議論は *glossae* の形式をと

ってなされるようになるが、M. はそれらの内容を比較検討し、そこではもはや negative theology, hyper-Realism 等は影をひそめ、思想的には衰退期に入るものとみなしている (chap. 5)。以降、A. 自体の見解への関心が高まり、C. D. に代わって B. による C. の忠実な翻訳が重視され、12世紀に入ると C. D. はほとんど無視されてしまう、と M. はいうのである。

以上みたように、本書においては、従来の一般的見解に対して多くの異論・反論が試みられ、また8—10世紀初頭といういわば思想的にはほとんど未開拓の時代に、論理学と神学の関連を中心に照明が当てられている。なお、筆者のみる限りでは、本書について J. J. O'Meara の書評が T. L. S. (Nov. 13, 1981) になされていることを付記しておく。

Jean Daniélou :

L'être et le temps chez Grégoire de Nysse.

pp. v+232, Leiden, 1970

谷 隆 一 郎

著者ダニエルはイエーガーと並んで、西欧に於けるギリシア教父研究の代表者の一人であった。既に1944年には、*Platonisme et Théologie Mystique* なるニュッサのグレゴリウス研究の先駆的著作を世に問うている。イエーガーもダニエルも、一般には、ギリシア教父の伝統の主流——即ち、アレクサンドリアのクレメンスからその弟子オリゲネス、更には「カッパドキアの三つの光」たる大バシリウス、ナジアンツのグレゴリウス、ニュッサのグレゴリウスに至る伝統——を、古典ギリシアの哲学、殊に広義のプラトニズムの継承・展開として捉えていることは、周知のこととしてよいであろう。ただ、ここに取り上げる著作の強調点は、必ずしもそうした連続性にはない。そこではむしろ、存在と生成に関するグレゴリオスの把握の独創的な面が示されるのである。もとより、グレゴリウスが先行思潮に多くを負っていることは言うまでもない。グレゴリオスの思索はその出発点に於いて、